

福岡市科学館 第22回 サイエンスコミュニケーション開発会議		作成日:2025年1月29日(水)
月日: 2025年1月29日(水)	時間: 13:00~16:00	場所: 福岡市科学館 6階サイエンスホール

出席者:

【委員】

- 日本ボーイスカウト福岡県連盟 理事長 ■ 井手
- 九州大学 大学院 人間環境学研究院 准教授・博士(人間環境学) ■ 木下
- 福岡市立高木小学校 学校長 ■ 園田
- 科学コミュニケーター ■ 本田
- 株式会社トータルメディア開発研究所 西日本事業本部事業推進部 チームリーダー ■ 姉川
- 独立行政法人 国立科学博物館 産業技術史資料情報センター 参事役・博士(工学) ■ 亀井
- 九州大学 大学院 芸術工学研究院 ストラテジックデザイン部門 教授 ■ 平井
- 福岡市科学館 館長 ■ 矢原
- 学校法人 産業医科大学 医学部医科物理学 准教授・博士(理学) ■ 吉田
- 株式会社西日本新聞社 こどもふれあい本部事務局 こどもタイムズ編集部編集長 兼 特別論説委員 ■ 久保田
- 大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 共創戦略統括本部 特任准教授・博士(医学) ■ 坂本
- 株式会社HUMIコンサルティング 代表取締役/コーディネータ ■ 中村
- 株式会社トータルメディア開発研究所 PPP事業本部部長 兼 九州事務所長 ■ 森岡
- 福岡テンジン大学 学長 ■ 岩永
- 公立大学法人福岡女子大学 教授・博士(工学、技術経営)・女性リーダーシップセンター副センター長 ■ 品川
- 国立情報学研究所 名誉教授・理学博士 ■ 高野
- 福岡市科学館 プロジェクトアドバイザー ■ 高安

【オブザーバー】

- 福岡市子ども未来局 子ども政策部子ども健全育成課 ■ 鐘ヶ江 ■ 興梠

【特定事業者/指定管理者】

- 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ 代表取締役 牛村
- 株式会社福岡サイエンス&クリエイティブ ■ 佐藤

【事務局】

- 福岡市科学館 事業管理者 ■ 吉武 ■ 野上 ■ 上田 ■ 高山
- 福岡市科学館 職員 ■ 林 ■ 大石 ■ 板垣 ■ 坂部
- 藤瀬 ■ 川添 ■ 高瀬 ■ 西澤
- 土田 ■ 鈴木(司会) ■ 今奈良(記録)(敬称略)

※当会議は、福岡市科学館特定事業の事業者並びに指定管理者である株式会社福岡サイエンス&クリエイティブが設置し、運営する会議である。

配付資料:

- ・次第 ・資料2 2024年度分科会進捗状況報告書
- ・資料1 前回議事録

■議事内容(概要)

●第1部

1. 福岡市科学館館長 挨拶

2. 前回のふりかえり(資料1)

3. 全体会議:各分科会の進捗状況報告・質疑応答(資料2)

<第一分科会> 一多様な学習プログラムの展開―

(目的)

これまでプログラムを作成する際、国立科学博物館(以下、科博)が作成している「科学リテラシー涵養活動」の体系表をベースに作成してきたが、昨年度は科博の体系表に代わる、福岡市科学館独自の体系表を作成することを目標とした。

様々なバックグラウンドや発達段階に対応できるよう、体系表の横軸を年齢で区切るのではなく、5つの「育ち」に分類した。

①新しい発見がある ②もっと広く知りたくなる ③より深く学びたくなる ④学んだ知識を活かしたくなる ⑤人に伝えたい

今年度はこの体系表の完成を目標にし、既存のプログラムがどの項目に当てはまるかを分類することとした。

(今年度の成果)

・体系表の作成

「5つの育ちの分類」を横軸に設定し、科博の体系表に代わる福岡市科学館独自の体系表を作成、企画書に反映させた。

当初は、5つの育ちの分類ごとに5段階評価を行い、レーダーチャート形式のグラフにしようとしていたが、評価基準が曖昧であったことや、作成したグラフの活用方法が不明確であるという課題から、最終的に表の形式にまとめることとなった。

福岡市科学館にはさまざまな育ちの段階にある人が来館するため、5つ全ての分類にアプローチが必要であることを前提としたうえで、特に重視したい段階や重点的にねらいたい段階に振り分けた。

・全事業の分類

作成した体系表に基づき、福岡市科学館の事業(アクティビティプログラム24個)を分類した。

・体系表の使い方の検討

体系表の使い方について分科会で検討した結果、以下のような案が出された。

a. 福岡市科学館の事業全体の偏りを可視化するためのツール

全事業を分類したことにより、5つの育ちの分類において、どの段階向けのプログラムが多い、または少ないかを可視化することができた。これをもとに、新たなプログラムを企画する際のターゲット設定の参考にできると考える。

b. 企画者・実施者館のずれを可視化するためのツール

プログラムを企画した担当者と、実際に実施する担当者間で、育ちの分類におけるアプローチやねらいに、ずれが生じる可能性があるとの意見が挙がった。この課題を解決するため、企画者と実施者それぞれが体系表に記入し、ずれを明確化する方法が提案された。これにより、企画者ディスカッションを促進し、どの育ちの段階の人たちに向けたプログラムを目指すべきかを共有・調整することが可能になる。

発言

矢原

高安

大石

c.実施者・来館者間のずれを可視化するためのツール
 プログラムを企画した担当者のねらいと、来館者の受け取り方にずれが生じている場合、体系表を用いて可視化できるのではないかと、来館者にアンケートを実施し、科学館側のねらいと来館者の受け取り方の違いを明らかにすることで、プログラムをより効果的に改善していけると考える。

(今後の課題)

体系表を実際に使用し、実務において有用かどうかを検証し、問題がある場合は改善を加え、完成を目指す。

(質疑応答)

- ・第一分科会は科学館における教育普及活動、サイエンスコミュニケーション活動に関する体系に対して、運営や事業をチェックすることができるようになるための体系表を作成している。 高安
- ・「もっと広く知りたくなる」に関しては、今回の表に含まれていないがSDGs家族会議が当てはまる。 矢原
- ・2月に全国科学博物協協会が開催され、今年のテーマの一つが「コミュニティとともに活動する博物館」となっており、社会に対してどのぐらいイノベーションをあたえているかという点が重要視されている。 高安
- ・「深く学びたくなる」という点においては様々な学びの段階があるため、プログラムによって段階的な違いがあるのではないかと。「深く」とはどのレベルのことであるのか。(小学生高学年レベル、中学生レベルなど)
- ここでいう「より深く」というのは中高生などのレベルの高い低いではなく、テーマについてより突っ込んで知りたくなるかどうか。横に広く知りたくなるか、縦に深く学びたくなるかの2択になるということ。 本田
- ・「学んだ知識を活かしたくなる」というのは、問題を解きたくなるということなのか、または社会に伝えたいということなのか。後者の意味である場合、「人に伝えたい」と、順番が逆ではないか。 高安
- 「学んだ知識を活かしたくなる」というのは、人で行い、共有することではなく、自分の手を動かして、行いたくなるというニュアンス。社会に伝えたいということのは、人に伝えたいに含まれている。 本田
- ・福岡市科学館は中高生向けのプログラムを行っているのか。 高安
- 中高生向けのプログラムとしては、クラブ活動などを行っている。同じメンバーで半年や一年間と長期の間共に活動し、深く学べるようにしている。基本展示室は未就学児や小学生の来館が多いこともあり、中高生向けのものは少ない。 大石
- ・実施者と来館者のずれを可視化するという点に期待している。アンケートが必須になるが、仮説をたてながら、インタビューを行い、声にならない何かを見つけてほしい。 品川
- 他ではしたことの無い試みなので、アンケートをとりながら内容ややり方を修正、調整して、最善を見つけていきたい。最初は一期一会の来館者ではなく、よく来られる常連さんに絞ってアンケートを行う予定。 本田

<第二分科会> 一大規模展示更新に向けた展示計画

(目的)

2026年度に実施する大規模展示更新としてふさわしい「次世代の展示」の方向性を検討し、次期大規模展示更新の内容を具体化する。今年度はキーワードである「ひと」をどのように展示に結び付けるかを中心に、展示案を議論した。今期の議論では展示体験する人を「ひと」として、体験を自分事とするための仕組みづくりを検討した。

(提言)

- ・起点・中間・終点の設定
 各展示を通じて体験したことが最終的にストーリーとなるよう、以下の構造を想定した。
 起点:自由に回る、または入口でテーマとなる「問い」の提示や「問題提起」を、その先の選択肢を設けることで主体的な研究を促す。どのように展示室で遊ぶのかを提言する。
 中間:体験の途中で振り返り、新たな発見の場を提供し学びを深める場所とする。特にフューチャーゾーンを「セーブポイント」として活用し、探求を促す。体験した内容に基づき対話や、展示物から得た知識の整理を行う場として設定する。
 終点:体験を振り返り、自分の現在・未来を考える仕組みを設ける。「みらいカード」の改良や「未来診断」などの導入により、個々の成長や未来への視点を記録することを目指す。個人へのアドバイスやアウトプット(絵を描く)等、未来を伝えるような仕組み。
- ・展示同士をつなぐ工夫
 来館者である「ひと」が展示物を通じて科学を「自分ごと」として感じられるよう、各展示物の体験がストーリーとして繋がる工夫が必要と考えられる。AIまたは「ひと」が各ゾーンを通じたつなぎ役となり、体験を通じて自分ごと化して探究することや社会課題の理解を深められるよう設定する。更に、一緒に来館した人同士の対話、または他の来館者同士が自然と関わる仕組みを導入する提案もあった。
- ・継続した学びへの工夫
 デジタルツールにより振り返りの記録や探究をサポートする仕組みを構築し、来館者が展示体験を持ち帰るなど、リピーターが継続して楽しむことができる体験を目指す。また個人の成長だけでなく、人間関係や社会、街の発展への影響も考慮する仕組みにすることで継続した学びを期待できる。
- ・未来を見据えた展示
 来館者が展示を通じて科学と自分との関連性に気づき、自分自身や社会課題について考える機会を目指す。自分や社会の未来についてポジティブな選択肢を示すことで、福岡市科学館の理念に掲げている「未来をデザインする」場を提供できると考えられる。
- ・以上の議論に基づき、来館者が主体的に学び、自分の未来へ向けた研究を楽しむ展示の実現を目指す。

(課題)

- ・技術活用と教育的配慮
 上記の展示を目指すにあたり、拡張現実 (AR) や仮想現実 (VR)、AIなどの科学技術を活用したインタラクティブな展示を取り入れる手法が挙げられた。この場合はAIの誤情報リスクに配慮が必要であるが、逆にAIの誤りを学びの機会として、リテラシー教育にも役立つことが考えられるといった提案もあった。
 また、人のサポートを組み合わせたことが望ましいが、サイエンスコミュニケーター不足などのため常時対応することは、現実的に難しいという意見もでた。
- ・年齢層ごとのアプローチ
 学年別ルートや検定形式を採用し、具体的なミッション形式の「問い」を設けることで、来館者が主体的に学びと発見を楽しめる体験を提供するという提案があった。他館調査の手法を参考に、当館の現来場者の動向を調査する必要がある。

(質疑応答)

- ・分科会の段階では、展示全体に、人類の関係性や人類史をテーマとして入れた方がいいとの案があったが、その点はどのようになったのか。キーワードが「ひと」であるため、隠れテーマとして人類史を入れた方がいいのでは。
 →話し合いの中で人類史を展示に組み込む話はでてきた。今回報告には入れていないが、案として消えてはいない。
- ・自分ごととして考えるために、最後に入館者へ学びの記録やポートフォリオを各個人に渡した方がよい。
 →個人個人が展示の中で、どういうことを行ったのか分かるものを、展示の終点の部分で返したいと考えている。具体的な形はまだ決まっていないので今後検討していく予定。
- ・「難しくないアブダクション」という表現がとてもよいと思った。具体的に内容を知りたい。
 →言葉だけで具体的な中身は決まっていない。分科会の中では自由に回るのではなく、先に問題提示をした方がいいという案とふらっと回った時になにかに気づき、自分で問題を見つかることから始めた方がいい、という意見の二つがでたため今後具体化していきたい。

<第三分科会> 独自性のある情報発信のあり方

(目的)

「人が育ち未来をデザインしていく科学館」を理念とする科学館として、科学情報に関する考え方をより明確にしつつ、異分野の各機関との連携や地域連携による独自性のある情報や、利用者や幅広い市民の協力を活かしたコンテンツを作り出す仕組み、福岡市科学館らしい提供の仕組みや活動等について検討する。

高安
 矢原
 高安
 本田
 高安
 本田
 高安
 大石
 品川
 本田
 板垣

高安
 板垣
 高安
 板垣
 品川
 姉川
 藤瀬

2024年の目標

- ①地域科学館として情報編集スキルや発信スキルの向上
- ②科学館アクティビティのアーカイブとコンテンツ化
- ③異分野との積極的な連携、科学館の利用者層の広がり
- ④ナビゲーター/ファシリテーターとしての機能強化
- ⑤科学館利用者の体験を蓄積できる仕掛けづくり

(提言・課題)

・科学情報に関する考え方

メディアごとの特徴を理解して受け取る情報を活用するメディアリテラシーがますます必要になってきている社会的背景を踏まえ、科学館として信頼性が高い科学情報の情報源を示すことが求められる。また科学的リテラシーや情報リテラシーを向上させるため、情報の「捉え方」「扱い方」を学ぶ機会を提供するような企画が求められる。

・異分野連携によるコンテンツ発信の強化

①大学・研究機関との連携

包括連携を結んでいる九州大学や自然科学研究機構との協働をさらに進めて、学・業実的なテーマを様々な視点で市民に提供する企画が期待される。取り上げるテーマや、具体的な内容については、利用者や市民と直接対話する機会が多い科学館スタッフに、アンケート等で募る方法が考えられる。

今年度夏、実際にスタッフに「福岡市科学館として取り上げたいテーマ」についてアンケートを採った結果、後述の通り様々なテーマ案が提示された。テーマ案について分科会内でも議論し、次年度以降に講演会やサイエンスカフェなどの形での実現可能性について検討中である。

アンケート回答数:34名 テーマ件数:58件

テーマ案:「AI」「量子」「宇宙」「スポーツ」「進化(歯・眼・脳など)」「脳(非認知能力、脳科学)」「コミュニケーション」「ストレス」「ウェルビーイング」「マイクロプラスチック」

②メディアとの連携

地元メディアである西日本新聞社等との連携も考えられる。西日本新聞の記事や連載を活用した展示、市民の目に触れる機会が多いテーマや内容をより深められるようなサイエンスカフェや講演会の検討、「こども記者」と協力した福岡市科学館の活動紹介などの連携を期待したい。

・福岡市科学館らしい提供の仕組みや活動

①サイエンスナビ・書籍での取り組み

科学館内ライブラリーである「サイエンスナビ」を、多くの来館者が利用しているのは福岡市科学館の特徴である。「サイエンスナビ」の書棚で、科学館スタッフだからそのオススメ本や最先端情報を紹介するなど、スタッフ一人ひとりの個性を活かした企画を継続して進めたい。

②情報のアーカイブ化・コンテンツ化

今年度開催した探究学習プログラムである「サイエンススポットまち歩きワンアップ」の内容をアーカイブし、WEBサイトで「レポート」として発信した。今後、他のプログラムでも、福岡市科学館らしいアクティビティを中心にアーカイブ化とコンテンツ化を進めることが望まれる。WEBサイトでの発信のほか、サイエンスナビシステムで他のコンテンツ(展示や書籍、別のアクティビティなど)と結び付けることで、来館者がより自発的に学べる機会を提供したい。

(質疑応答)

・館内活動のアーカイブ化やコンテンツ化というのは、科学館として、一步踏み出した感じがある。数年前から文化庁より科学館や博物館に情報のデジタル化を進める指針がでており、ある自然史科学館では市民の疑問や興味をアーカイブ化する試みが行われている。

・利用者の疑問や興味関心をアーカイブ化することは考えているのか

→市民の方々が抱えている疑問や興味関心と、他事業との連携を直接的に繋げての議論はあまりなかった。科学館スタッフへ向けたスタッフが興味のあるテーマについてのアンケートの中には、スタッフ自身の興味はもちろん、普段接している来館者の意見が反映されているものも多かった。

西日本新聞との連携により、子ども記者がどのようなテーマで科学館を取り上げるのか、なにを面白いと感じるかを共有していきたい。

・次年度以降、サイエンスカフェや講演会などの様々なイベントを行い、そのデータを蓄積して、新たな展示につながるという仕組みがこれからできたら良いと思う。科学館の活動を蓄積し、発展させ、具現化していく必要がある。

・基本展示室で活用するという意味でよいか。

→そちらも含めて考えている。

・科学は突然生まれるものではなく、様々なものの蓄積であり、そこに異分子などが入って飛躍がある。アーカイブを作ることは蓄積を行っていくうえで、とても良いと思う。やってみないと実際どのようなことになるのか分からないので、まずはやってみることが重要になる。

・データベースを作ることは良いが、使ってもらうことの方が難しい。作ったものの使用方法がわからず使えないデータベースになってしまう事例も多い。AIを活用し、アーカイブやデータベースを活用し拡張していく方法も考えられる。

高安

中村

姉川

高安

姉川

高安

高瀬

< 第四分科会 > 一次世代型地域科学館の機能一

(目的)

最終5ヶ年計画の目標である「イノベーションの実施」に向けて、2023年度に検討された「次世代型地域科学館」のあるべき姿に近付くために必要な「科学館機能」を検討する。

(今年度の目標)

・変動する社会に対応するテーマをスタッフが自発的に提案し展示やアクティビティに昇華できる仕組み

・イノベーションを起こすための方法

・科学館に必要な機能

(今年度の成果)

・「次世代型地域科学館に必要な機能」が5つ挙げられた。

① 科学館全体として、体験型科学館の基本的な展示を含む学習プログラムを精密に構成し、科学知識の習得にとどまらず、学習成果を日常生活や社会で活かす「総合知」を目指し、その体験自体が楽しく気持ちの良い「体験」と「環境」を提供する。

(知識習得型から総合知・Well-being型へ)

② 科学館の各利用対象に即した「事業目的」を設定し、目的に即した「サイエンスコミュニケーション」を中心とした手法を開発する。(少子高齢型社会を配慮した全世代型へ)

③②の開発を協議して開発し提供するために「科学館との連携」「各種研究・教育機関との連携」「企業や市民団体との連携」などからなる「福岡市科学館ネットワーク」を活用する。

④ 学習プログラムは学校教育支援に加えて、対象別に「早期学習」や「拡充学習」などの「2E(twice-exceptional)教育」に配慮する多様な才能(gifted&talented)教育を開発する。

⑤ 全ての人が施設を公平で平等に利用できる機会均等に努め、安全で安心して利用できるインクルーシブ型科学館とする。

(提言)

・教育普及活動として必要な機能

(探究的で豊かな学習活動の場を提供する)

現象を体験して理論(原理)を考え(do science)、自己表現することができる(デザイン思考)プログラムの実施。

「失敗していい科学館＝自由に試せる科学館」

具体案:ジュニア科学者養成講座のような、デザイン思考やdo scienceを重視した教育普及活動の実施および継続した教育普及活動の実施および継続。

- ・展示として必要な機能
(一人ひとりのストーリーを作る機会を提供する)
知的好奇心への刺激を受け科学への理解を深められる機会の提供。
具体案: 展示内容を保管し、原理そのものを体験し知識を得ることで刺激を受けられるような展示ツアーや実験などの イベントの実施。
- ・情報交流、情報形成(public relations:PR)として必要な機能
(利用者とスタッフが共に育つ)
利用者だけでなくスタッフもともに学び対話を通して成長でき、それぞれが「同じ目線、違う視点」で情報交流を行うことができるしくみ。
具体案: スタッフの専門知識の定着やサイエンスコミュニケーションの普及。
異業種との交流を通して多様な人脈をつくりネットワークを構築すること。
- ・その他、先進的の科学館として必要な機能
(時代を切り開く科学館活動)
時代が求める先進的テーマを取り上げ、提供する。
精神的、肉体的に快適で豊かな空間を提供する。
「do science」「自由に試せる科学館」のさらなる追求をする。
学会発表などを含む活動実績を、積極的に提供する。

(今後の課題)

今年度は科学館に必要な機能を討議したが、これを実際の運営に落とし込む具体的な方法も議論する必要がある。また、次年度以降は「変動する社会に対応するテーマをスタッフが自発的に起案し、展示やアクティビティに昇華できる仕組み」や「イノベーションを起こすための方法」についても討議していく必要がある。

(質疑応答)

- ・私が館長に着任する前から行っていた、ニュートンコースやSDGs家族会議、館長ゼミなどの最高学年が4月で高校生になる。今後高校生が増え、三年後には大学生になる子も現れる。福岡市科学館から育った高校生や大学生が、今後科学館の運営に参加し、様々なアイデアを出すということが、「次世代型科学館」なのではないか。
- ・中学生や小学生のなかにも本格的にユニークな研究をしている子もいる。「オカリナを聞くと人の心が癒される」という現象を科学的に実証したいという子がいたので、ご家族を対象に、オカリナを聞いて血圧や脈拍がどのように変化するか調べるという実験を提案した。実際に実験を行い、6回測ってみたところ、6回とも血圧が下がった。6回では偶然の可能性があるので、もっと多くの人で実験をすべきという助言を行った。その後、3倍の人数のデータをとり、今現在そのデータをもとに、この現象についてより深めようと取り組んでいる。また、キッズクルーも自分たちのサイエンスシアターに取り組んでいる。
- ・先ほどギフト教育や早期学習の話があったが、それらとは少し異なり、シンプルに科学館が好きで、科学館を通じて学びたいと思っている子どもたちもいるので、そのような子どもたちを活かした新たな科学館にしていきたい。
- ・『「自由に試せる科学館」のさらなる追及をする』という記載の「追及」の「及」は「探究」の「究」の方が良いと思う。第4分科会の案の中に「探究」と「拡充学習」があり、そちらにつなげた方がよい。
- ・利用者とスタッフが共に育つという点において、第三分科会の提言にあった「アーカイブ化」につながる場所がある。「共に育つ」ということは結果だけではなく、過程が大事であり、その過程を可視化できて、誰もが確認することができるアルバムのように、何年か前の自分たちをふりかえることができれば、科学館に来る人だけのアーカイブではなく、全ての人が過去を振り返り、今の自分の成長を感じることができる。作った人だけが分かるものではなく、きちんと整えられたものができれば、科学館としてどういう進化を求めているのか、どういうベクトルを持っているかを、確認することができると思う。
- ・館長の話の中ででてきた、オカリナの話について、オカリナを吹いている人の心にはどのような変化があったのか。吹いている人も気分が落ち着くなどの変化はあったのか。
- とくに実験はおこなっていないが、その子はオカリナが好きで好きでたまらないので、穏やかな気持ちなのではないか。
- ・第四分科会の話聞き、もっと早く出して欲しかったと思った。他の分科会の土台や入れ物になる場所であったので、もう少し早く出していただければ、他の分科会がやりやすかったのではないか。
- 第四分科会の立てた、枠組みや機能を活かして使っていくと、第一分科会の「プログラム」、第二分科会の「展示」、第三分科会の「情報」もその機能に対応する形でフォーカスすることができた。
- 他の分科会の進捗状況を見ながら、議論していたので、同時並行でないとできなかった。
- ・アーカイブ成功例としては国立国会図書館にあるレファレンスサービスのデータベースである。司書がどのような質問を受けて、それにどのように対応したか、その答えた根拠はどの書籍にあるのかなど、それらすべてを記録している。そのようなデータベースを福岡市科学館で持っていれば、他の科学館も同意し、同じ取り組みを行う館が増殖していくのではないかと考えた。
- ・教育論については、色々な論議がありつつも、すでに大筋がかたまっているから、どこを拾い、何を切り捨てるのかを意識して、プログラムを考えて行く必要があると感じた。変えられるところと変えられないところははっきりしてきたので、今後は期限と予算の範囲内で、どう変えていくのかを考えなければいけない。
- ・SDGsは節約や環境保全という意味ではない。産業界の取り組みとして行われているものと捉えて、混合しないように意識する必要がある。

矢原

坂本

品川

矢原

亀井

岩永

亀井

高安

本田

まとめ

全体の中での科学博物館の傾向でいうと、数年前に文化庁が「科学館や博物館は社会教育機関だ」ということを説明していたが、今回はあえて「観光施設という面」を強調している。次世代型科学博物館とは今までの形は残しつつも、今の時代にあった新しい試みを行うものであり、今現在、福岡市科学館は先頭を切って取り組みを行っている。今までの科学博物館の枠にとらわれないあり方を各部会で検討していただければ幸いだ。

<休憩> 10分

●第2部

4.分科会協議:各分科会にわかれて協議 60分

5.全体会議:各分科会の協議内容報告

<第一分科会> 一多様な学習プログラムの展開―

- ・体系表の素案はできているので、素案を使いこなせるか、実際どのように使うかを具体的に話し合った。使い方は3つあり、1つ目は事業全体、プログラム全体のバランスをとるといいう使い方、2つ目はプログラムを企画・作成した人と、これを実施している演者の中の偏りや視点を図で可視化するという使い方、3つ目は実施している演者と来館者との受け止め方の違い、一致性やずれを可視化するという使い方がある。
- ・上記のうち、特にプログラムに直結する、2つ目と3つ目の使い方について詳しく話した。実際に体系表を使用して、企画者と演者の視点は大きなずれがあることが分かった。しかしそれは決して悪いことではなく、それぞれがどこを重視するかを考えているからこそであり、それを可視化することによって、ブラッシュアップしたり、チューニングすることができる。それらをどのような場で意思統一をするのか、情報共有ができるのか、そのタイミングはどこなのか、そのためになにを準備をすればいいのかを情報として、確立する必要がある。
- ・来館者の受け取り方と演者とのずれを埋めることは難しい。来館者側は終わった後すっきりして、次に行きたいという気持ちがあるので、できるだけ手短に、こちらが与えた情報を受け止められるようにする必要がある。また、その情報を演者がどのように拾い上げるのかが分かる仕組みづくりから始めなければならない。
- ・できるだけ様々な来館者からの情報を集めたいが、常連の来館者などの個々の生の言葉で、拾い上げることも必要であり、いくつかのパターンを想定して、来館者とコミュニケーションを取るということを念頭に置き、パターンや方法を練り上げていきたい。事業全体の考え方については時間が足りなかったため、また次回に。

<p><第二分科会> 一大規模展示更新に向けた展示計画―</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで議論した中で形はある程度見えてきており、計画の礎はできているので、さらによりよくするための様々なアイデアを出し合い、この時間を有意義に活用した。 ・議論した内容としては2つあり、1つ目は、計画の中で行った来館者の行動調査について、その中で得た気づきや内容を共有した。基本展示室の展示は約40個あるが、1～2時間の滞在で、10～30個ほどしか回れていない人が非常に多い。毎日来館している人も、時々来館している人もどちらも一定数おり、頻度によって異なるが、今回行ったアンケートを通して集中している人気の展示が見えてきた。ゲーム性があるものやスコアがあるもの、競えるものは共通して、多くの人が体験しているということが分かった。展示室のストーリー作りに当たって、このアンケートが参考にならないかと思い、行ったが、高安先生からは「これだけではストーリーを作るのに足りないので、さらに深いターゲットの分析やそれぞれの展示でどのような時間を 過ごしているのかという点にフォーカスして、調べた方がよい」とのアドバイスをもらったので、それらの調査を今後行っていこうと思っている。 ・2つ目は、AIを使って展示室のストーリーを作るという案について議論した。40個ある展示をAIに学習させ、様々な人の知識が入ったストーリーを作ると、数人の人間が作るストーリーより精度が高く、子どもたちが面白いと思うストーリーを作れるのではないかと結論になった。 	<p>姉川</p>
<p><第三分科会> 一独自性のある情報発信のあり方―</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回まとめた提言の中では、2024年度の目標であったナビゲーター、ファシリテーターとしての機能強化についてあまり語られていなかったため、その点について議論を行った。また、アーカイブの具体的な方法論や、実際どのように整理していくと良いかについて話した。 ・ナビゲーターとしての機能強化の中で特に中心となったのが、情報発信に限らず、科学館がターゲットとしている対象が若年層に特化しているという点である。子どもだけでなく、その親世代に向けたアプローチをより検討できるとよいという話が出た。子どもたちが楽しめるアクティビティは、大人たちも一緒に楽しめるものが多い。 ・福岡市科学館は「多角的な視点で見る」ということを、意識的に行っている館であり、強みである。来館者が「行けばなにか新しいものが見つかるかも」、「科学館に行けば疑問に思っていたことが何かわかるかも」と思えるような場であることをアピールし、来館者に寄り添って、ナビゲートできる人材を育成していくということが重要なのではないだろうか。上記を踏まえて、来年度にむけて実践していくとよいのではないか。 	<p>中村</p>
<p><第四分科会> 一次世代型地域科学館の機能―</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度提言されている、教育普及活動として必要な機能、展示として必要な機能、情報交流、情報形成 (public relations) として必要な機能、その他、先進的科学館として必要な機能の4つの機能を中心に話し合いを行った。また、前半で出た意見についても触れ、議論した。 ・前半の館長の話に出た、オカリナ好きの子のように、科学館で実際に実験を行い、それが展示になるような仕組みがあるとよいのではないか。 ・現在館長が行っているような専門的な講座を、スタッフが自ら提案し、興味関心があることを講座にした方がよいとの意見もあった。 ・サイエンスショーに来ている子どもたちはテーマではなく、サイエンスショーを行っている人、サイエンスコミュニケーターに興味を持つことが多いので、同じサイエンスコミュニケーターのショーでも様々なテーマの内容を横断することができる。しかし、参加している人や来館者同士の対話が現在あまりないので、そこにどうコミュニケーションを作るかを議論した。 ・イギリスや台湾などは医者が処方箋としてミュージアムに行くということが行われており、科学館がそのような館になるためにはどのようにすべきかを議論した。 ・前述した4つの機能について、一つ一つについては議論できているが、実際にどうすべきかをまだ具体的に考えられていないので、我々第四分科会は今後具体的な案を出し、来年必ず1つ実行することを提言としてまとめた。 	
<p>5.全体会議:質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回議論に上がらなかったインクルーシブやインバウンドについて、科学館はどういった影響を受けているか。 →先日の大雪でバスが動かなかったときなどは、中国からの旅行者の来館が多かった。インバウンドの方は特に平日に多く、日本の小学生が、学校などあってこれない時間が特に多い印象。土日は全体的に来館者が多いので、具体的には分からないが欧米や中国、台湾の方が多い。 ・港区のみなど科学館に関わっているが、天気の良い日に急にインバウンドの方が増える印象。天気が悪く行く場所がない時に行く場所として、福岡市科学館は交通の便がよく、来られることが多いと思う。 ・外部の講師の方も福岡市科学館の活発な取り組みや、事業展開の先進性、数の多さに驚いていた。 	<p>高安 高山 高安</p>
<p>7.議長挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体を通して、利用者の実態を把握し、利用者の行動や要望に即したものを検討するべき、という点が共通していた。 ・長い間日本では、科学館は社会教育機関として学校を援助するものであり、学校に代わる第2の社会教育機関であると言われていたが、現在は娯楽や観光、あるいは社会的な課題について取り組む施設という考え方が強調されている。これらについての率直な意見を出し合い、福岡市科学館の取り組みを通して、今後とも4つの部会で検討して行ってほしい。 	<p>高安</p>
<p>8.次回開催の連絡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度もSC開発会議は続けていく方針。分科会も4つできる予定。展示に関しては、大規模展示更新が予定されているので、別の部会が発足すると思われる。今年の議論を受けて、事務局で来年の方針を練る。 ・次回の本会議は来年度6月を予定している。 	<p>高安 鈴木</p>